



## 世界の保育者たちの戦い

津守 真

世界の保育者たちが横浜でのOMEPP世界大会に集まったのは八月のはじめだった。開会式直前まであれほど朝も夜中も働きつづけていた私の家のファックスが、世界大会が終わったとたんに、びたりと活動をやめた。不思議なくらいに突然である。そこに集まった人たちは、いまはそれぞれの仕事の場で日常生活の楽しみと悩みと多忙さの中にある。

OMEPP世界総裁ピノー女史は帰国されてすぐに、丁重な礼状の最後に、ファックスが必要でなくなつて寂しいと記した手紙をくださり、それからひと月以上何の音沙汰もなかった。十月になって、久しぶりにピノー女史からのファックスには、帰国後すぐに風邪をひいて、めずらしく二週間もベッドの生活をしたこと、ケベックの秋は音楽会や美術展で賑やかなのに、どれにも行かれず残念だったことが記され、次のよ



うに書かれていた。「私たちは、人間性―それは子どもには自然に備わっています―が、大人たちが人為的に課した社会的、物的環境によって危機に瀕しています―を早くから守り (preserve)、励まし (encourage)、高め (enhance) ねばなりません。日本の世界大会はこの点で私たちを助けてくださいました」私の訳語が不十分であるが、初期に保護し守ったものは、それを保つためには励まされねばならず、更に文化的に高めていかねばならないという意味である。今回の世界大会のテーマだった「人間を育てる」ということは、こう考えたと子どもから大人までの課題である。ピノー女史は世界のさまざまな国の人たちと、子どもの問題についての共通理解をつくるにはどのような語で表現したらよいかを工夫しておられる。

そんなとき、ユーゴスラビア OMEP 委員長 ミリアナ・ベジッキ女史から手紙を頂いた。日本に来て、世界各地の OMEP の友人たちと会うことができ、とくに、日本に友を得て嬉しかったと記され、また、「OMEOデー」で講演することができた感謝のことが述べられていた。「私たちは、これからも日本の保育者たちと交わりを一層ひろげ、OMEP を通じて協力したいと思います。来週は、セルビア各地からの教育者、心理学者たちの集まりがあるので、横浜の世界大会と日本の幼児教育のことを報告します (訪問した保育園のビデオも持っています)」と記されていた。ちょう



ど、新聞でユーゴと平和合意の記事が大きく報道され、相反する勢力であるセルビアとボスニアに言及されていたので、私は感慨深くこの手紙を読んだ。女史はその戦乱の地で、子どもたちが遊ぶ幼稚園をつくるのに尽力されている。

北アイルランドからの緊急報告をされたブリッド・ルディー女史は世界大会十日前になって、仕事の場をはなれられず来日できなくなったとファックスを送ってこられた。折角プログラムまで印刷したのに残念に思っていたが、直前になって来日が可能になった。八月一日、横浜のホテルに到着されたルディー女史は、そんな動乱の地から来られたとは思えない明るい表情の若い婦人だった。講演の内容は、その明るさとは逆に「過去二十五年間の紛争のゆえに北アイルランドの子どもたちは「失われた世代」になってしまったのか」との問いに始まり、この同じ時期の日本の子どもたちとはあまりにも対照的だった。「私の父は政府と警察によって絶えず投獄されていました。警察が私たちの小さな家のドアを蹴って入り、すべての物を滅茶苦茶にひっくりかえました。私の学校のカバンは検査され、私は七歳で逮捕されました」。政治と宗教の葛藤により、ふたつのセクトに引き裂かれた環境の中で、彼女は分裂した両側の子どもたちが直接に接触する遊びの場をつくり、更にそれにとどまらず、青年たちが偏見と憎しみを自覚し、それを超えて対話する場をつくった。世界大会での彼女の話から察せられるように、彼女の仕事は前向きで明るい。平和への貢献により、彼女は



「ヨーロッパ婦人賞」を受賞した。ルディー女史は遠隔の地から日本まで来られながら、世界大会に出席されただけで直ちに帰国された。十一月になって、北アイルランドの民族紛争が和解に近づいていることを日本の新聞が報道したが、子どもたちの間を走り回るルディー女史の明るい笑顔がその一助になっているのだろうかと思像した。

十一月にドイツOMEPPのゲラー女史その他の方々が日本の教育視察に来られた。そのときの日本の印象として次のことを話された。「ドイツの子どもは七歳までは遊びとファンタジーの世界にいる。日本の子どもたちは忙しくて遊ぶ暇がないと皆が言う。子どもはいますぐにでも遊びたいのに、それではどうするかを日本の教育者や親たちは本気に考えていないように見える。自分たちはそれが理解できない。日本の子どもたちは遊ぶよりも勉強している。ドイツの子どもたちも勉強するが、自分が愛し、関心をもっていることに向かって勉強する。日本の子どもたちは学校のために勉強する」。実に率直な観察である。

世界の保育者たちは、皆それぞれに異なった社会の困難と取り組んで、子どもの幸せのために一人間を育てるために一戦っている。そのことは世界の保育者に共通である。私共もそれぞれ異なった場所で、同じ戦いをする者になりたい。

(愛育養護学校)